



連載第四回

■ 神戸とエトランゼ ■

いつまでもあかるく

——シルマー氏を訪ねて——

陳 舜 臣
え・中 西 勝

熊内にあるO・W・シルマーさんのお宅は、日本家屋である。畳にすわって、ビールをご馳走になりながら、お話をうかがう。

「ぼくは味噌汁が好きなんやけど、ワイフがなかなか作ってくれんです」

うた子夫人をかえりみて、あざやかな神戸弁でシルマーさんは言った。その微笑にはなんともいえぬミリキがある。

ドイツの新葉『カルドピン』の新聞広告に、遅しく、そしてやさしいドイツ人の顔が大きく写っているのを、おぼえておられる方がいるだろう。それがシルマーさんだ。

「タンレントづいてますねん」

カルドピンのほか、シデンの広告写真にも顔を貸している。ラジオの「めおと善哉」に出たこともあるし、テレビでダイマル・ラケットや森光子と共演したこともある。そのとき森光子はシルマーさんの妹で「モーリン」という役だった。

本職はドイツ領事館員。一九一五年、神戸で生れたシルマーさんは、純粹の青い目の神戸っ子である。山本通りのカソリック教会の角っこ（現在は教会の構内になっっている）の家で育った。どちらかといえば下町の環境である。だから、おっとり育ったのではない。十一才でドイツに帰国するまで、シルマーさんの少年時代はケンカに

あけ暮れた。

三人兄弟の末っ子に生れたシルマーさんは、御両親に
とってはいささか期待はずれの子だった。というのは、
男の子が二人づついたので、つぎは女の子が望まれてい
たのである。三人目も男だったが、せめて大きくなるま
で赤いオベベを着せ、女の子として可愛がろうというこ
とになったらしい。

写真は左よりシルマー氏と陳舜臣氏（シルマー邸で）



「これがぼくですよ」

アルバムの写真を出してシルマーさんは言う。氏の指
は、スカートをはいた可愛いおっぱの女の子をさして
いる。

「へえ？」

私は思わず写真から目をあげて、シルマーさんを見る
ドイツ人のあいだでもおそらく長身のほうであろう。筋
肉がしまって、ヘビイ級のボクサーのようなシルマーさ
んの幼年時代が、この愛くるしいおっぱ少女であろう
とは。……

しかしこの女装のガキ大将は、北野町や山本通りをあ
ばれまわった。敵が多数だと路地に相手を誘いこんだ。
多人数であっても、狭い路地では一対一の対決しかでき
ない。つまり各個撃破ができるわけで、なかなかの戦術
家だったようだ。

幸福な少年時代だったが、十一才のときシルマーさん
は母国で教育を受けるために神戸を去った。そして帰国
早々、お父さんが神戸で亡くなったという悲しいしら
せをうけた。シルマーさんのお父さんは日本人のあいだ
では「八番さん」で通っていた。むかし居留地や外人住
宅地では、車夫などが外人の名前をおぼえられないので
もっぱら屋敷番で呼んでいたのだ。外人なかまでは、
「神戸の大仏さん」と言われていた。ウエストが二・五
メートルという巨漢であった。一人乗りの人力車にはの
れなかったし、初期の市電のボロ車輛は、大仏さんがの
るとギョウときしんで、乗客が青くなったそうだ。

シルマーさんは少年期の後半と青年時代初期の十年間
を母国のドイツで学生生活を送った。この学生生活で、
シルマーさんは将来の進路を変更せねばならぬ不幸に遭
遇した。建築を勉強していたのだが、実習のとき誤って
右手を電気鋸にまきこまれて、指を二本切断されたのだ
った。指がなくては設計図を引くことは不可能である。
建築技師をあきらめてシルマーさんは二十一才で神戸に
戻った。そして商館につとめた。

だが、シルマーさんは朗らかさを失わなかった。どんな不幸に見舞われても、どこまでもあかるいのである。くらい騎はミジンもない。いまでもジョークにかけて誰にもヒケはとらない。エイプリル・フールになると、シルマーさんのまわりの人たちは極度に警戒する。それで、まんまとやられるのだそうだ。

またシルマーさんは漫才がお好きである。ラジオで漫才のあるときは、万難を排してきくようにするという。漫才の笑わせ方と間まのとり方などが、ジョーク製造人シルマーさんには参考になるのであろう。いまシルマーさんは大阪のドイツ総領事館につとめておられるが、昼休みの領事館で漫才の声を耳にされる人があるかもしれない。それはシルマーさんの携帯ラジオから流れているのである。

昭和二十年。終戦まもなく、シルマーさんの運命の右手にもういちど不幸が襲いかかった。神有電車（神戸電鉄）の顛覆事故にあって右腕をつぶされてしまったのである。それから十八年のあいだ、なんども入院手術してやっと腕らしい形はとり戻したものの、まだ手は肩のへんまでしかあがらない。そして手首からさきはだらりと垂れたままで、もちあがらない。近くまた整形手術を受けられるという。

かさなる不運にも、シルマーさんの天性の陽気はゆるぎもしなかった。ジョーク製造のほか、切手のコレクションという趣味がある。このほうは本格的なもので、かつて個展をひらいたこともある。私など素人にはよくわからないが、一冊のアルバムの時価が、「まっ十万円くらいかな」とのこと。それが数十冊もならんでいるから壮观である。

切手から話題をかえて、

「奥さんとのそもそものなれそめは？」

とたずねてみた。シルマーさんはニヤニヤ笑っている

奥さんのほうが悪びれずに、

「結婚したのは昭和二十五年でした」

なれそめは？ 場所は大阪駅。神戸から通勤していたシルマーさんが快速（当時の急行電車）から下車すると毎にち同じホームで上り普通電車を待っているお嬢さんがいた。シルマーさんはそのお嬢さんに心をひかれ、ついある日、思い切ってお茶に誘った。

例のお嬢さんはギクリとした表情で、

「だめですわ、今日は……」

「今日がだめやったら、明日はいいんですね」

その場のがれに「今日がだめ」と言ったが、「明日は」と置みこまれると、もう逃げる言葉がない。やむなくうなずくが、つぎの日、約束の場所にそのお嬢さんは友だちと一しょにあらわれた。「明日は」への仕返しである。デイトを承知したものの、「一人で」とは言わなかったのだから。

こうして三人デイトがはじまった。いつでも三人で、二人になったことがない。シルマーさんは不満だった。小声で「いい加減にあのジヤマノさんを連れてこないで下さい」と囁くが、そのたびに「いけませんわ」とやられる。やっとなんたって念願の二人きりのデイトがかなえられることになった。

そのお嬢さんが現在のシルマー夫人であるのはいうまでもない。当時は住友化学につとめ、毎にち大阪駅から吹田へ通っていたのをシルマーさんに見染められたのである。結婚してから奥さんは里帰りしても、いちども泊ったことはない。ダンナさんのそばでなければ夜もあけないのである。世にもむつまじい夫婦とお見受けした。

青い目の外人といえ、豪華なホテルのロビーにくつろいだり、異人館の奥まった居間のソファーにからだを埋め、足もとの緋の絨氈には珍種の愛玩犬がうずくまっている。——といった情景をわれわれは想像しがちであるだが、シルマーさんはそんなふうには日本の庶民の世界から隔絶された所で生活しているのではない。つつましい日本家屋の畳の間で生活している。庶民のにおいがそこにある。日本の生活に溶けこんでいる、いや、溶けこむ

といった意識さえまったくもたずに暮しているといえるのだ。碧眼の下町っ子。それがシルマーさんのタイトルである。

シルマーさんのおかるさは、そのまま神戸のおかるさである。神戸の町だって戦争で傷つき、いろんな苦難を経験してきた。それでもおかるいのだ。シルマーさんも右手にまつわる二度の不運にもめげず、底ぬけにあかるい。

奥さんが切手の整理をしているシルマーさんのうしろの戸棚をあけ、そのまま台所のほうへ行くこうとする。



「しめてくれよ。風がはいって切手がとんでしまうやないか」

「あら、ごめんなさい」

奥さんが戻ってきて戸をしめる。が、なんだかフにおちない表情をした。やがて、

「あっ、やられたわ!」

窓をあけ放したのならともかく、戸棚の戸をあけて風がはいってくるわけではない。奥さんはまたかつがれたのである。

シルマーさんはすました顔で切手の分類をつづける。油断もスキもない。いつ一ぱいくわされるかわかったものではない。

「ひどいひと!」

奥さんはダンナさんの背中を打つが、ボクサーのようなシルマーさんには通じない。

このほがらかなやりとりのなかに、神戸の風土があると私は思う。神戸の町も受けた傷をかくし、それをいやしながら、陰翳のないおかるさもちつづけてきたのだ。帰りに玄関まで送って下さったシルマーさんは、鴨居のところひよいとかがんだ。長身のシルマーさんは日本家屋では、うっかりすると頭を打ってしまうのだ。部屋を出るときは、どうしても頭を下ねばならない。

シルマーさんと日本、そこになにかびつたりしない点があるとすれば、それはこの家屋構造のサイズだけであろう。

(作家)

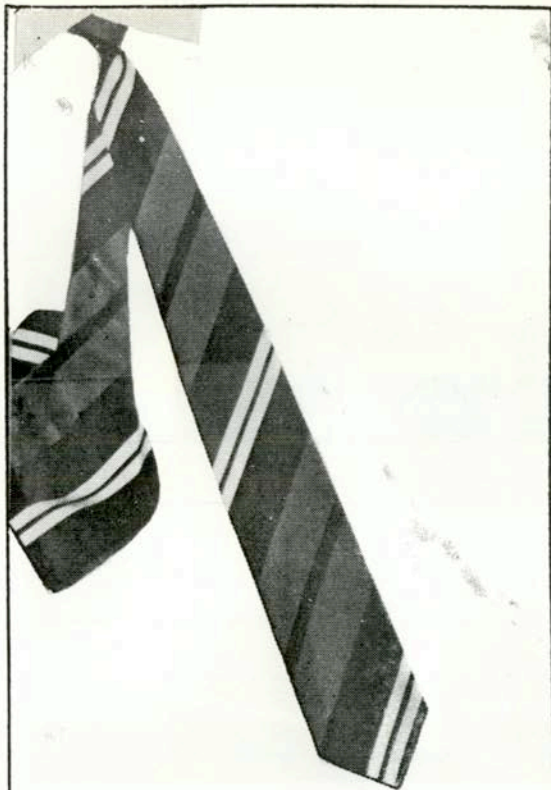
初夏を装う美しい帽子



婦人帽子

マキシム

神戸・トアロード TEL ③ 6671-3
東京・銀座3-2 TEL (535) 5041



ネクタイの

元町バザー

神戸・元町



特 選
 ハンドバック
 専門の店

シロサ

元町2丁目・③0813

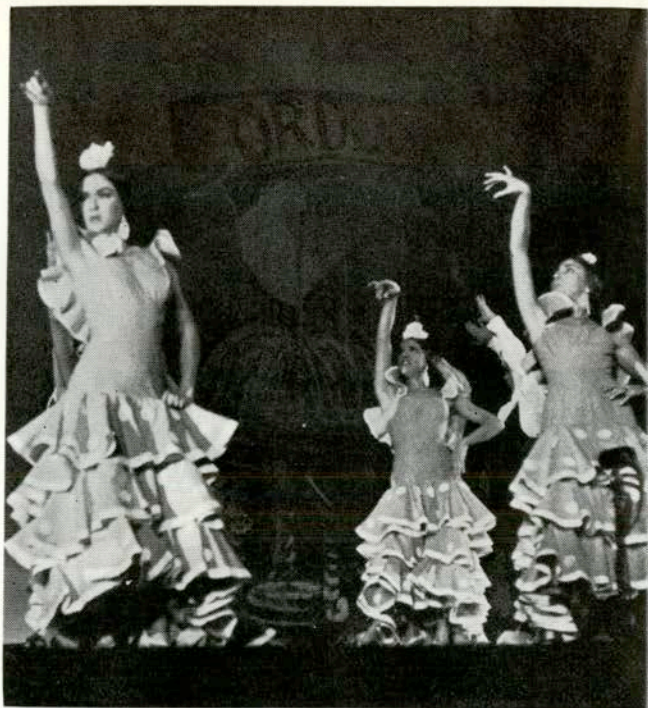
Leather Newton



美しさを創る…

アスター・ニュートン

トア・ロード③1818



私の好きなスター

情熱の「フラメンコ」

清水安子
(フラメンコ舞踊家)

唄や踊りが民族や国家を象徴するのはいうまでもない。追分は日本である。それと同じ意味でフラメンコはスペインである。スペイン舞踊と云っても種々あるが、その中、南スペイン(アンダルシヤ地方)のフラメンコ舞踊がスペイン舞踊を代表する花形である。この民族舞踊は、昔東方から渡来したジプシー族によって伝えられ発達したもので、極めて精神的な、東洋的な、エスプリを持ったもので民族の魂と性格を描き出している舞踊である。

民族の類似点で、我々日本人をその踊りの中に魅了され、そしてそのたびに兄弟の血の通いを感じさせるのである。

一九五五年に、宝塚劇場でフラメンコ舞踊及びカンテ(唄)フラメンコを見ました。私はその情熱的

な踊りに、すっかり心を奪われてしまった様でした。特に世界的舞踊家としてのバルガス・ヒメネス(靴音をならして踊る)は驚異的でした。その時から私は「フラメンコ舞踊のとりこ」になってしまったのでしよう。気がついた時は、本格的に東京でフラメンコの勉強を始めていたのです。

私が現在こうしてフラメンコ舞踊を未熟乍ら舞台上で演じ、そのために自分の喜びを感じる時、バルガス・ヒメネスの両名舞踊家に心から感謝せずにはいられません。それ以来映画に、グレコ・アントニオ、最近来日したアレグリアス舞踊団、ピラール・ロペス舞踊団と、次々に、新作品スパニッシュ・バレエならびにフラメンコ舞踊を見せていただき、幾度か涙し

した。特に、アレグリアス舞踊団の方々とは親しく語りあうことが出来て、本当になつかしい、兄弟に会った感じがいたしました。だから、私にとっては「私の好きなスター」は個人その人を指すのではなく南スペイン人その民族の情緒と性格、そのためには哀愁と情熱が、

ギター之音を聞く時

恋の哀愁を、

その踊りを見る時

恋の情熱を、

バルガス・ヒメネス・グレコ・アントニオ、ロペス・アレグリアス舞踊団こうした著名の舞踊手から醸し出される雰囲気は一つであり私はそれを愛するし、それが「私の好きなスター」でもある。

(写真はアレグリアス舞踊団)

新らしい革袋に

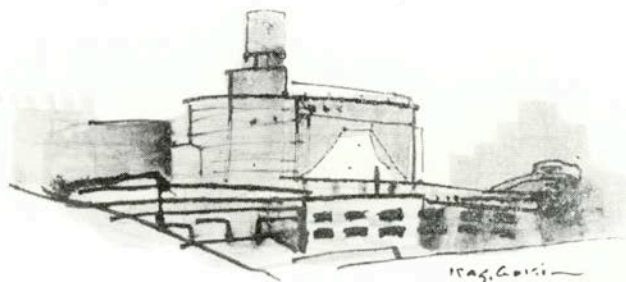
新らしい酒を

赤根和生 え・青木一夫

国鉄三宮駅の南側に青い海を背に、緑濃い六甲山に向きあって傲然と立ちほだかるあの醜悪なまでに写実的なバカデカイ人工の富士山は、風光明眉を誇る神戸の玄關口にいいようなない軋りに充ちた違和感を齎らしているが、あれは恐らく神戸で△最も歪んだ風景▽のひとつであらう。写真の原画をタイトル・モザイクに移すということとは技術的に生易いことではないが、仕事の珍らしさや困難はそのまゝ決して誇りとはならない。あれ丈よい条件のところ、苦心して陳腐なものをもってくるのは「新らしい革袋に古い酒を盛る」類の、技術の浪費にすぎないモザイク独特の表現力を活かして洋々とダイナミックなミナト神戸の美を象徴する壁画が現出したならば、周囲がそのまゝ、縁縁になりオリジナルな芸術になり得たろうし、より大きな意味のP・Rの実を広告主にも齎らしたことだろう。恐らく神戸市にはあゝしたせつかちで独善的な商業広告を阻止する条令もそんな夢を実現する財源もなかったろうが、あの広告こそ地方文化を毒し、均一化して「力」と「無知」の象徴であらう。「オオマ

タココニモマウント・フジク」という外国観光客の眩やきを聞いたら六甲山も苦笑するだろう。しかし、市民は苦笑では済まされない筈である。駅前には市民の顔でありセメントでぬられた顔の泥は洗い落しようもない汚点を残し続ける。

駅前、それは戦後文化の発祥地であった。駅という駅の前に出来たマーケットでござっぱりした下着を工面し食料を仕入れ、一杯のカストリから自由への、民主主義への論議が開いた。間もなく駅弁が復活し、そして駅弁のあるところ、無数の「駅弁大学」が誕生した。ここから地方文化の画一化が始まった。文化の二元性、多元性は日本という風土の大きな特性であるが、その雑多な様相の中から大きなエネルギーが産れつゝあるのは事実である。そして、マスコミの発達とその同時性は文化の落差を減じ、地方文化のレベルをあげるのを助長したのも事実であるが、同時に依然として中央集権的、権威主義的な社会形態と、はき違えた(ローカル)性へのコンプレックスとが入混って、地方文化が小間物屋的な小さ



な完成体へと危険な傾斜を続けているのも事実である。こうした中央の「雛型」的な風土からは地方文化の新しいエネルギーは決して産れはしない。日本文化全体の多元性を地方文化にそのままおきかえたところで文化のエネルギーとはならないのである。今日の地方文化は、丁度、白米に配するに、フライに天ぷら、サラダに漬物といった雑多なバラエティに富みながらその実大して栄養にもならない、所詮間に合せの食事ではない「駅弁」にも似たものになりつゝある。名をつけて「駅弁文化」でも云おうか。この駅弁文化を助長する因は外からも強

制されるがわれわれの内にもある。中央、又は他都市にあるものは何でも移入したがる悪癖がそれである。

例えば昨年の「兵庫県芸術祭」である。内容は一番煎じのお粗末で独自性は皆目みられないあのような官製のお祭りからは何ものも産れはしない。われわれの周囲にはお祭りが多くて、クリスマススのパカ騒ぎのあと一週間も経たずにお正月も祝わなければならない忙しさなのである。無意味なお祭りは是以上作らないでほしい。とは云え、先頃の「美術家祭」は美術家達自身の中から産れて来たお祭りで、この流派を超えた親睦から今後産れてくるものを期待する意味でひとつの意義をもつものといえよう。文字通りのお祭りに終って「了つたようだが、われわれの周囲から「歪んだ風景」を抹殺し、新しい美を創るエネルギー源となるような運動の展開を今後に期待したいものである。例えば今回の集いも、漸やく具體的な発言を見つゝある「美術館設置」問題などは無縁な処にあげられた花火のような感がするが、お役所に予算がないならば、たとえさゝやかでも自分達の絵も抛出し合つてでもという先ず美術家自身の中からの動機すけの姿勢を見せてほしい。われわれ市民もたすきがけて街頭募金に立つ位の用意はあるのである。

「近代美術館」乃至はそれに類したギャラリーの設置は緊急の問題になりつゝある。たゞ前述のように単に単なるものねだりの形で設置を急いで、駅弁のトンカツのように食い足りないものが永久化されては取返しがつかない。今迄の発言はすべて「作って下さい」「考えてみましょう」という個々のすれ違いに終っているようにみえる。せめて、一日も早く広く学識経験者をも入れた「学問対策委員会」を設けてその規模なり時期なりを総意によって十分に検討してほしいものである。われわれの視覚は馴れ易いものである。歪んだ風景への馴れから駅弁文化はぬくぬくと育つだろう。新しい革袋に新しい酒を盛ってこそ新しい地方文化は独自の芳醇さを醸し出すのである。

(美術評論家)

すてきなお嬢さん

こんにちわ！

きく人・岡部伊都子（随筆家）

話す人・新谷沢子（彫刻家・二紀会）

五月も近い陽はまばゆいほどで、新谷さんの家の庭も緑が美しく、その庭には、彫刻品があちらこちらに並べられていて楽しい。

新谷沢子さんは、女流彫刻家として彫刻に夢と若さを打こんでいらっしやる、颯爽としたお嬢さんで、健康な明るい感じの人です。

新谷さんは神戸っ子には馴染深い、彫刻家ご一家、沢子さんの理想の男性であるお父さんが新谷秀雄さんです。お兄さんの新谷琇紀さんと沢子さんは、仲のいいご兄妹で、コンビで展覧会を開かれるのも四回目とか。

岡部 「新谷さんはお生れになった頃からずっと、この辺り（中山手通）にお住いなんですか」

新谷 「小学校の頃、すこし田舎で過しましたが殆ど神戸です」

岡部 「はじめてご自分で物を創って見ようかなと思われたのは、おちいさい頃なんでしょうか」

新谷 「いいえ、高校生の頃で、学校の進学指導が本格的になった、三年生の夏ごろから、この道を選んでみようと思っただけです」

その頃、兄が金沢美大へ行っていましたしネ、さかんに制作していましたので刺激されて……」

岡部 「お父さまも、お兄さまも彫刻をなさっているわけなんですけれども、新谷さんに直接、影響の大きかったのは、やはりお兄さまでしょうか、幾つ違いですか」

新谷 「二ツ違いです。彫刻をはじめたのはやはり環境が左右したんでしょうネ」

岡部 「お生れになってからズツとですものネ。お父さまやお兄さまのお仕事で、沢子さんがアツと思われるような感動を覚えられた、印象をお持ちになったことはありません。目を覚ましたというか、心を揺り動かされたというふうな……」

新谷 「父などが、個展をひらいたり、作品を制作した時には、やはり、そんな感じは受けました」

岡部 「沢子さんは、高校生のころに美大を目指された訳ですけども、美大にはいる為にはどういう用意が必要なんでしょうか」

新谷 「デッサンとか粘土の使い方なんかは家でやっています」

岡部 「美大の審査というのはやはりそういう、実技も必要なんですか……」

新谷 「そうですね。入学試験は、実技と学科の平均点ということなんです」



緑の美しい新谷邸で……手前は沢子さんの彫刻
右より岡部伊都子さん新谷沢子さん

岡部 「いま、どういうことを表現なさりたいと考えていらっしやいます」

新谷 「いま私が行っているのは、人体なんですけれど、もネ、それを造形的に私なりにディフォルムしていつているんです」

岡部 「私は娘のころから、絵には親しみがあつたのですが、なかなか彫刻はわからなかった。——この頃、展覧会がありましても絵もいけれどやっぱり、彫刻の世界でないと書えないもの、**「重さ」**というかそこにあるという、存在の確かさというものが彫刻でないと感じられない気がしてきました」

新谷 「私も絵を書くこともあるんですが、何か彫刻の

方が魅力があるんです」

岡部 「土を一ひねりしてここにおいても、そこに在るという感じがするんですネ、それを絵は線で現わすでしょうどうしても**「重さ」**を線でなかなか表現できない——それだけにかえて彫刻で人をうつ作品をつくるのは難かしいんじゃないかと思えますネ。

具象的なものと抽象的なものとありますけど、同じ人体をテーマとなすっていらつしてもご自分なりに表現の仕方に変化が自然にあつただろうし、どうはいつて、今どういうところにいらつしやるんでしょうか」

新谷 「学校では人体を学んだ期間というのは短かつたんです」

岡部 「やはり、デッサンからおはいりになる訳ですか」
新谷 「いいえ、抽象的な基礎になる空間構成とかそういうものを1年間やりまして、2年生のある期間だけ人体をやつて、学校の方針として抽象的なことやりましてしよう、だから卒業しても写実的なものに弱く、抽象的なものに走っているんです。

私の場合、完全な抽象ではないんですけれどもネ、やはり写実的な勉強も充分にやりたいと思っています」

岡部 「京都へは神戸からお通いになられたんですね。京都と神戸とどちらがお好きですか」

新谷 「京都は京都としてのよきはありませんけど、私は神戸の町が大好きなんです。(笑) 京都に行けばお寺をあちこち廻りたいと思つていたんですけど結局、あまり機会がなかつたんです」

岡部 「私は仕事のお蔭で仏さまを見に行く機会があるんですけど、一人で好きな時間を過せといわれたら多分そういうところには行かないでしょうが——仏さまも人体をモデルにした彫刻ということになるんでしようけどネ、体の表現のなかにその時代の思想みたいなものが出て来ているような気がするんですの。

時代に対する共感があつたりなかったりで、線やら、ポリリウムのおかれ方に好き嫌いが出てくるんです。

だから、新谷さんが作っていらっしやるものは、いまの時代でないと生れないものですし、新谷さんでなくてはできないものなんです」

新谷 「そうですね、私などは夢中でとり組んでいるだけで……」

岡部 「抽象的なものを判るだけの感覚というものが一般にはまだ熟し切っているとは言えないでしょうね。お作りになってそう言う空しさをお感じになりませんか一生果敢うったえていても、受け取る側に理解できないというような、すれ違いというようなことがあるだろうと思うんです。私なども抽象的なものに弱くてネー（笑）それこそ感覚的に空間構成がなんとなく好きだったり、なんとなく判らなかつたりでね」

新谷 「やはり、その空しさは感じます。作ってそのものが強くうったえているものを汲みとってもらえるような作品をつくらなければいけないんですし、意慾的なものをもっと作りたいと思っていますー私自身、まだ、完全な写真をマスターしていませんし、やはり、抽象をやっている曖昧なところがあつたりして、まだまだこれからもっと勉強しなければと思います」

岡部 「新谷さんは、ほかにご趣味といえばどんなことをなさっていますか」

新谷 「写真をやっているんです。腕はたいしたことはないんですが、それに自分のアクセサリーを作って見たりするんです」

岡部 「やはり、自分でお作りになることがお好きな訳ですね」

新谷さんの作品をいま、アトリエで拝見したんですけど、ほんとにダイナミックな気迫というものが強く出ていると思うんですよ」

新谷 「そうですね、よく皆さんにそう言われるんですけど小さい体でよくあんなのが作れるなあと言われたりネ」

岡部 「迫力があるのは、一つは線の省略がよくきいてるんでしょね」

いいですね、新谷さんのようなまだお若くって、初々しくってあどけないようなお嬢さんが、こんな力強いお仕事をしていらして。

非常に地味な努力の積重ねの仕事だし、技法も体力が必要なジンドイお仕事なんですネ。表現のためにはヤスリですり出したり、一般の人が考えられない努力なんですね」

新谷 「制作中は別に苦痛は感じません、冬に粘土をいらついても平気だし、針金で手を切っても悲しいとは思わないし、むしろ楽しいですよ」

岡部 「お仕事三昧にはいられる訳ネ。制作なすつていて、どうしてもご自分の思いどおりにならない時はありますか」

新谷 「それは、ありますね。そういう時は、その作品から3、4日離れていて、また制作にかかると言うようにしています」

岡部 「62年度には、芦屋市展で受賞、兵庫県展奨励賞2紀会展奨励賞など沢山賞をいただいでいらつしやいませ」

新谷 「神戸市展はないんですか」

岡部 「神戸は非常に沢山、美術家をかかえていらつしやるのに残念ですねー神戸に対する、お望みを語っていただきましょうか」

新谷 「やはりなんといっても美術館がほしいですね。京都、大阪にあるような、外国から来る美術展が展覧できるようなものがほしいですね。それに市民の憩いの場として彫刻などを飾って、楽しめるような場所があればいいんですけど、父が欧州で撮影したスライドなんか見ると、外国には沢山あるんですよ。それに兄が言うんですけど、エチプトでは山の岩壁に柱を沢山彫刻して、またそこをくり抜いて彫刻が沢山おかれてるんだから、神戸のように山の多いところは、山をデザインすればいい」といつてましたが、奇抜だけど面白いですね」

岡部 「なるほどね、そう言う造型をして下さい。例えば市とか県とかが美術家の皆さんにお願いして、一つの山なら一つの山全体をデザインしていただければ、それは立派なものが出るでしょうに」（文責・編集部）



Fashion

VIENNALINE

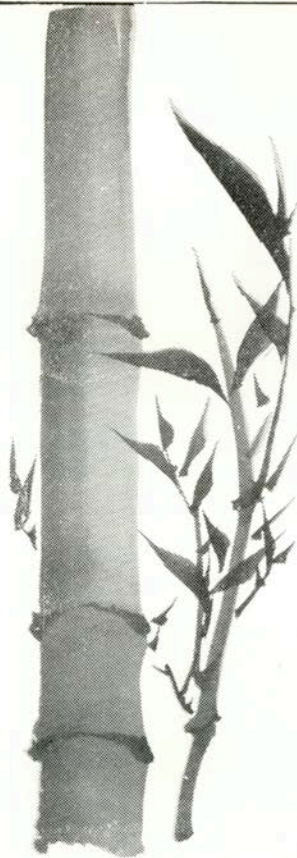
世界のめがねがやって来た

神戸眼鏡院

元町3・電③3112-3・0551(貿易部)



きものと細貨



東京 神戸

銀座店	新橋店	東店	西店
TEL.	TEL.	TEL.	TEL.
(571)	(571)	③	③
7721	7080	0683	0883
1代	7	2029	266代
小松ストア地階			

おんがら庵

神戸っ子のビール



（ビール通）

ビール通はエネルギーが大好きです。働くのが大好きです。1日の汗をビールのさわやかなノドごしこごもに消してしまえます。飲むのに場所を選びません。時間にはばられません。男らしく裸でラッパ飲みだつてやります。しかし、たったひとつうるさく守ることがあります——

ビールの銘柄、それはアサヒビールです



一月四千隻の船が入りする神戸港だが、中にたったひとつ、第六関門沖に仮泊したまま、もう五ヶ月も動かない船がある。

運輸省航海訓練所の練習船「進徳丸」（一世）は、昨年十一月末に廃船処分となり、生れ故郷の神戸に帰ってきた。かつて神戸高等商船学校の練習船として、海外に雄飛した白鳥のようなブネ。神戸高等商船学校が創立されて間もない大正十三年に、当時の三菱神戸造船所で進水した。初めは帆船だったが、その後いまの汽船型に改

孤独な船

伊達俊太郎



造された。終戦直前に二見沖で米軍機空襲を受けて危く沈没しかかったが、その時も、この進徳丸は不死鳥のように立上がり、これまでに二千数百人にのぼる船乗りを育ててきた。

先日、仲好しのY船長とランチで神戸港周辺を回ってみた。明るい日差しを浴びた集中配船期の突堤はどこも内、外の貨物船でぎっしりつまり、ミナトはどこも活気があふれていた。カモメを追って防波堤の外に出たときに、初めて進徳丸の姿が視界にとびこんできた。近寄っ

てみた。白かった船体はすっかり古ぼけてねずみ色に変わり、赤いきつ水までがだらしなく波にあらわれている。

三十九年の船齢ではむりもないが、何ととっても紅顔の「海の男」たちの姿が甲板にみえないのがさびしい。長い冬が終っても、まだじつと動かない進徳丸は、「老醜」ということばさえ連想させて、あわれだった。神戸高等商船学校を出たY船長は「これで私は初めてハワイに行ったんだ」とポツリといった。みると、潮風にやけた船長の顔は、妙にこわばっている。

昨年暮れ、運輸省は、進徳丸を廃船処分にしたが、ゆかり深い神戸市が昨年末にこれを払い下げてもらった。須磨海岸に固定させて青少年ホームに利用しようというのが市のねらいだが、まだ改造費のメドがつかず、港外に放置したままというわけ——。市は「決してほおろっ放しにしてるワケじゃあない」というが、まだ予算化の準備はできていない様子。須磨海浜公園の人気ものになるまでは、まだ大分時間がかかることだろう。

風波に耐え、めざす航路をいつもまじめに進んでいた練習船進徳丸。もう太平洋を横切ることはない。Y船長といっしょに乗ったランチは小さな船体を、三回も四回も、回った。Yさんは何もいわなかった。そして、私たちが陸に上がってつめたいビールを飲みほしたときたったひとこと、彼はいった。

「フネって奴は錦を飾って郷里に帰ることがないんだ。一生懸命働き回って、結局は、海底に沈むか、スクラップにされるか、うまくいって見せ物にされるかだ。フネって奴はかわいそうな奴だ」——。

Yさんは、目を閉じたまま、また何もいわなくなりました。Y船長は外航船二十年のベテラン。戦時中は輸送船を動かして何回も死ぬような危険をくりぬけてきた人だ。その夜のYさんはめずらしくグデングデンに酔ってしまっていた。家までおくり届けた玄関先で、まだYさんはあやしげな口調でつぶやいていた。

「進徳の奴はかわいそうだ……」と。
(新聞記者)



紳士服飾・婦人服飾

セリザワ

紳士服飾//六・丸前 ③-3900
 婦人服飾//六・丸前 ③-1695
 婦人服飾//三宮センター街 ③-6114
 婦人服飾//姫路やまとやしき ②3-1221



KOBEのセンスで選んだ
美しいアクセサリのかずかず

コスチュームアクセサリ-

芸 げい **夢** む

神戸店/トアロード ③8643・2293
 大阪店/心斎橋ロビー (211)5153・1044
 心斎橋名店街(小丸ビル) 211-8503

ready-made

既製服を着る

福 富 芳 美



5月、青く澄みきった空、緑の山へ、そして街へと、じっとしていられないさわやかな季節です。初夏の装いを若さで謳歌するのも今が一番ではないかと思えます。

最近既製服も随分と種類がふえ、若い人達の着る楽しみ、買う楽しみが十分味わえるようになりました。

既製服にはオーダーとは違ったよさがあるものです。オーダーは出来る迄の順序をしつかり身に合うよう仮縫いをし、着る人のからだに合せて作るのですが、既製服は出来上がったものをからだに合せなければなりません。だからいいと思って買い求め、家を持って帰って身につけてみて、こんな筈ではと自分の買物に後悔されるようなことはないでしょうか。既製服をお買い求めになる時のアドバイスをいたしましょう。

神戸はジャレたセンスを持った人が多いと言われていますが、神戸には神戸のセンスを持った商人がジャレた洗練された商品を店々に飾っているのですから、素晴らしいと思えます。まず、色とデザインをよく見ることが大切です。

デザインは着ることと活動しやすさを考えて選ぶことが大切です。それには組合せに便利でアクセントのつけやすいセレーツなどがいいでしょう。又、ひとシーズンしか着用出来ないようなデザインはさけるように

したいものです。面白いもの、大胆なものをどうしても着てみたいと思われる人はリゾート的なねらいで着て下さい。普段着はいつも品よく着るということです。

買い求める、その一瞬にその人のセンスがベスト・ドレスサーであるか、どうかが変わります。

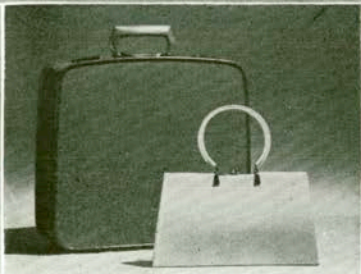
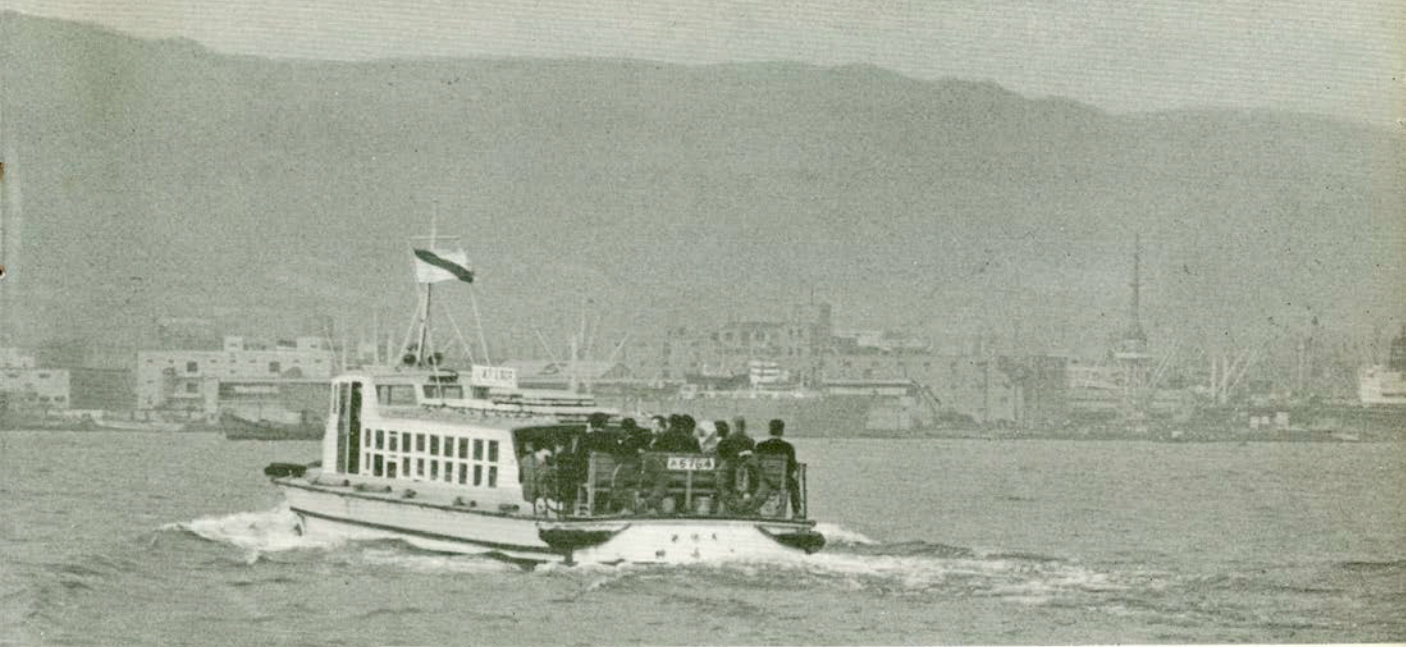
気に入ったら、次にもう一つ大切なことは仕立をみるということ。たとえば、どんなに色やデザインが素晴らしくとも、仕立が粗雑では既製服としての値打は半減してしまいます。仕立かたのこまかい部分迄、注意しましょう。洗たくする場合はどうだろうか、むやみにフリルやシンエウのあるものは、案外、見かけは素晴らしくとも洗たくの時に困ることがよくあるものです。アイロンするときはどおだろうか、など忘れないで調べて下さい。

色、デザイン、仕立、その次は、商品を着てみましょう。お店の方はあまりいい顔はしないでしようが、ちょっとした心のくぼりがお買得に結びつくと思えばなんでもないことではありませんか。軽卒に早まった気持でお買物をしますと既製服ならずとも、どんなお買物にも損なのですから……。

最近、話題になっている、プレタ・ポルテというのはこれはフランス語で、高級既製服と言って、日本でも、さかんにとり入れられています。一部の繊維メーカーやデパートがパリの一流デザイナーのパタンなどで、日本の生地を使い、日本で作った作品を売り出そうとしています。が、そおして作られたプレタ・ポルテが我々の体に合うのはまだ遠いようです。お値段もなかなか高級で、今の段階ではオーダー並のよう……。

将来は我々にマッチしたジャレたプレタ・ポルテが必ず誕生するでしょう。

既製服は買い求め、すぐに着られるのが魅力。安値だといって飛びつかず、信用出来るメーカー品を選ぶことが必要です。既製服をきこなせる、それは若い人たちの特権ではないでしょうか。(神戸ドレスメーカー女学院院长・大丸神戸店顧問デザイナー) 〓談



あらゆる靴の専門店

大上靴店

元町1 ③3962~3964

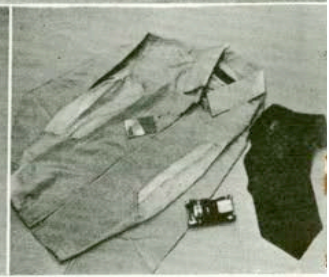
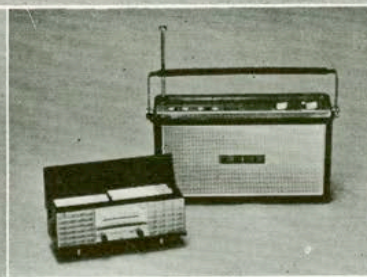


流行のトップを知らせする
メンズショップ

千秋堂

元町4丁目④6959

すばらしい神戸の観光ライン
一六甲山・須磨・神戸港—
お買物は美しい
神戸のトップショップで
お楽しみ下さい。



初夏の装いのお仕度を
秀品店友の会加盟店

トーレイ洋装店

新聞会館1館 ㊟2818

男子洋品の店

フナキヤ

元町3 ㊟3617

あらゆる電器製品の店

元町電機

元町6 ㊟3701~5

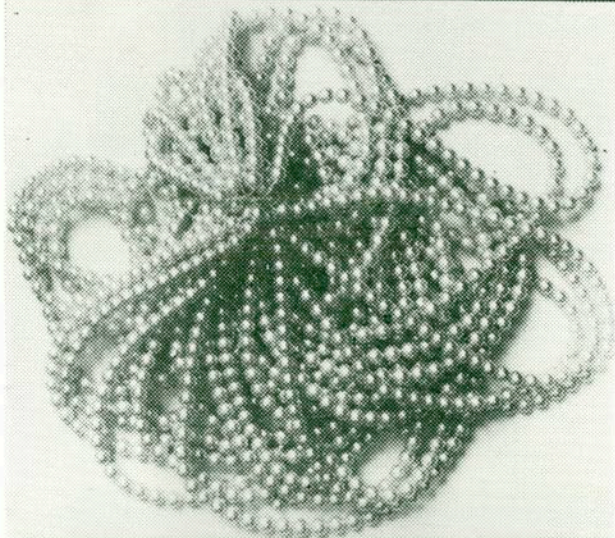
紳士洋品の店

サカエ

元町2 ㊟5122

斯界の代表タサキパール

ネックレス、リング、ブローチ
真珠装身具一切



養殖加工
K.K. 輸出販売

田崎真珠

取締役社長 田崎俊作

本社 神戸市兵庫区旗塚通6丁目9番地 TEL神戸 (23) 3321-3
東京店 東京都銀座西6丁目5番地(釜本通) TEL東京 (572) 2655
神戸店 三ノ宮駅前神戸新聞会館秀品店内 TEL神戸 (225) 646